

『赤と黒』の構造（三）

吉 田 廣

* 本稿は「大阪経済法科大学論集」第103号の pp.39-82の続きである。

目 次（ゴチック箇所が今回分）

はじめに

第1章 時間構成

第2章 話法

第3章 空間構成

第4章 視点

第5章 語り手と登場人物

第6章 レトリック

第7章 文章構造

第8章 ふたたび時間構成

第9章 ふたたび話法

第10章 ふたたび空間構成

第11章 ふたたび視点

第12章 ふたたび語り手と登場人物

第13章 ふたたびレトリック

第14章 ふたたび文章構造

おわりに

第8章 ふたたび時間構成

● 前章からの梗概

パリに到着して1週間足らずの後には、ジュリヤンはラ・モール侯爵の秘書としての生活を開始する。ラ・モール邸に住み込み、年給2千フランの手当を受け取る秘書の生活である。ラ・モール夫人のサロンでは、毎夜、豪華な晩餐が催されていた。ジュリヤンも毎晩これに加わるようになった。その晩餐は華々しいものであったが、

その場で会食者たちが話し合っていることは退屈きわまりない内容ばかりであった。言わば「精神の窒息状態」がその支配的雰囲気であった。以下のテキストは、ジュリヤンがラ・モール邸でのそのような生活をおそらく既に数週間送った頃の箇所である。

● テキスト（下巻47頁1行目～50頁1行目）

好意を見せてくれる連中のひとりから、ジュリヤンが教えてもらったところでは、それからまだ半年とたっていないのだが、ラ・モール夫人は、王政復古以来郡長だった気の毒なル・ブルギニオン男爵を、二十年あまりも出入りした褒美として、知事にしてやったのである。

この大事件がサロンの常連たちの熱意をますますかきたてた。それ
5
までなら、ごくつまらぬことにも腹をたてたところなのだが、もうど
んな目にあっても絶対に腹をたてなくなった。じかに失礼なふるまい
に出ることはめったになかったが、侯爵夫妻が食卓で、そばの席にい
る連中にとってはたえがたいような言葉を、ちょいちょい交わし合っ
ているのを、ジュリヤンはこれまでも耳にしたことがある。この貴
10
族たちは陛下の御馬車に陪乗を仰せつかった人々の子孫でないかぎり、
だれに対しても公然と心からの軽蔑を見せる。十字軍という言葉にだ
けは、このひとたちも尊敬のこもった厳肅な顔になるのを、ジュリヤ
ンは知った。ふつうの尊敬など、いつもていのいいお愛想にすぎな
15
かった。

この豪華と退屈のなかにいて、ジュリヤンが興味をもったのは、
ラ・モール氏だけだった。ある日、侯爵が、あの気の毒なル・ブル
ギニオンの昇進には、自分などなんの力ぞえもできなかったのだとい
いはるのを聞いて、ジュリヤンは好意をもった。侯爵夫人に対する心
20
づくしだったのである。ジュリヤンはピラール神父から真相を聞いて
いた。

ある朝、侯爵の図書室で、ピラール神父がジュリヤンと一緒に、相
変らずけりのつかない、例のフリレールとの訴訟の一件を調べていた

とき、ジュリヤンが突然いった。

「先生、毎日、侯爵夫人と一緒に晚餐をいただくのも、やっぱりわたくしの義務なのでしょうか？ それともわたくしに対する好意から出たことなのでしょうか？」 25

「このうえもない名誉だよ！」と、神父は腹をたてて答えた。「アカデミー会員のN……さんなどは、十五年来、ご機嫌伺いに通いつめているが、甥のタンボー君に、そうした名誉を手にいれてやるのができなかつたじゃないか」 30

「わたくしにとっては、先生、それが仕事のうちで、いちばんつらいことなのです。神学校にいたときのほうが退屈しませんでした。ときどき侯爵のお嬢さんまでがあくびをしているのを見かけます。出入りするお客さんたちが、愛想がいいのには、慣れていらっしゃるはずですが、わたくしは居眠りをしそうで、やりきれないのです。お願いですから、どこか安い宿屋にでも行って、四十スーで晩飯が食べられるように、お取計らってくださいませんか」 35

ピラール神父はまったくの成上りもので、大貴族と晚餐を共にすることは光栄の至りだと思っている。自分の気持を一生懸命ジュリヤンにわからせようとしていると、軽い物音がしたので、ふたりはふりむいた。ラ・モール嬢がきき耳をたてていたのを見て、ジュリヤンは顔を赤くした。彼女は本を取りにきて、すっかり聞いてしまい、ジュリヤンに多少の敬意をいただいた。《このひとは生れつきむやみと頭を下げるようなひとじゃない。このおいぼれの神父さんとはわけが違う。まあ、この神父さん、なんてみっともないでしょう！》 45

晚餐のとき、ジュリヤンは思いきってラ・モール嬢の顔を見ることさえできなかったが、令嬢のほうは親切にも言葉をかけてくれた。この日は大勢の客が来ることになっているので、令嬢はジュリヤンにも居残っているようにとすすめた。パリの娘たちは年配の男があまり好きでない。それがなりふりをかまわない男なら、なおさらである。サロンに居残っているル・ブルギニョン氏の仲間たちは、光栄にも 50

しょっちゅうラ・モール嬢にからかわれている。ジュリヤンは、たいして頭を働かせなくても、そのくらいのことには気がついてた。この日は、わざとそうしたのかどうかはわからないが、令嬢がこのいや 55
な連中を気の毒なくらいやりこめた。

ほとんど毎夜、侯爵夫人の大きな肱掛椅子の陰で小さなグループをつくる連中がいるが、ラ・モール嬢はこの中心だった。集まるのはクロワズノワ侯爵、ケーリュス伯爵、リュス子爵その他、二、三の若い士官で、いずれもノルベールかその妹の友達だった。この連中は大きな青い長椅子に陣取る。この長椅子のはしに、派手なマチルドのすわっている椅子と向き合って、かなり低い小さな藁椅子にジュリヤンが黙りこくってすわっている。こんなつまらない場所を、取巻き連のだれもが羨んでいた。ノルベールは、そういう立場のジュリヤンに、一晩じゅうに一、二度話しかけては、それとなく引き立ててやる。そ 65
の日は、ラ・モール嬢から、ブザンソンの城塞のある山はどのくらいの高さがあるのだろうかときかれた。その山がモンマルトルより高いのか低いのか、ジュリヤンにはまるっきりわからなかった。ジュリヤンはこの小さなグループの連中の話を聞いて、心から笑いだすことがよくあったが、この連中のいっているようなことを考え出すことなど、70
自分にはできないと思っていた。わかるにはわかっても、話すことのできない外国語のようなものだった。

I 『読み解く』第8章の概念装置

『読み解く』とは、筆者が2008年10月に大阪経済法科大学出版部から上梓した『「女の一生」を読み解く——フランス小説の徹底分析——』の略記である。まず、その第8章の要約から始めよう。

小説のストーリーの進展を大まかに眺めると、出来事の連続が淀みなく一様に語られているという印象が生じがちである。しかし、断章凝視の観点からテクストに迫ると、決してそのようなシンプルな叙述方法が採られていないこと

がわかってくる。

まず、何らかの理由から、語り手がストーリーの進展を一時的に停止することがある。時間の流れがそこにおいては堰き止められてしまう。

一般的に言って、小説の言説には、登場人物の視点に立つものと、語り手が自ら直接的に文章を紡ぎ出すものの2種類がある。この内、後者のタイプの描出では、登場人物のそのときどきの行為や感覚が語り手の考慮の埒外に置かれる。その結果として、物語の進行は全く停止してしまう。物語の進展をしばらく横に置いて、特定の登場人物のプロフィールを語り手が描くところなどは、その好例である。

このような箇所では、叙述が時間軸に沿って進められない。ある状況に置かれた人びとの反応が列挙されており、それらの人びとの喚起の順序は、実際には相互に並べ替えることが可能である。そのような有り様においては、登場人物への言及が等分になされることもあれば、特定の登場人物の描写が詳細になされることもある。後者の場合には、ストーリーの進展の一時的停止が、ある人物を詳しく描き出すための方便という性質を強く帯びる。また、前者の場合には、それぞれの登場人物の人柄や風貌が対照的に浮かび上がってくる。

もっとも、必ずしもそこに持続時間が想定されていないということではない。やや矛盾した言い方だが、「持続の枠のなかで停止する時間」という現象もあり得る。

次に、小説文でしばしば見られる「語られない時間」がある。これは、ストーリーを構成する因果関係の鎖の環になり得ない出来事を割愛してしまうための常套手段である。

「明るる朝」「その夕方に」「一月後のある昼下がり」などの文言が用いられているとき、あるいは、そうした文言があってもおかしくないときは、いわばブランクな持続時間がストーリー展開のうえで生じる。われわれ読者がそれに対して違和感を抱かないのは、小説文が、時間軸に沿って逐次的に出来事を述べる言説だと言うよりも、むしろ、因果関係の連鎖のうえに強固に打ち立てられる言説だからである。

さらに、この種の時間の途絶は相対的でもあり得る。つまり、小説文では、

主人公をはじめとする主要人物の時間は詳述されるが、それ以外の登場人物が過ごした時間は大雑把にしか語られない。これは、主要な登場人物、わけでも主人公の生活を照らし出すための手段である。これを用いることによって、語り手は引き締まった言説を物する。ここにおいても、因果関係の連鎖が固く築き上げられる。

最後に「整理される時間」に触れておこう。小説文では、諸種の出来事が必ずしも時系列的に語られるとは限らない。特に自然現象を喚起する場合には、整理された形でそれが描き出されることがよくある。これは至って当然である。自然が非形式的であるのに対して、美術や文芸をはじめとする芸術は、多かれ少なかれ形式的なものだからである。『読み解く』第8章では、ジャンヌの陣痛が、そのように整理された形態のもとに描き出されていた。つまり、陣痛という自然現象が、強弱の変化に対応する3つの様相のもとに整理された形で喚起されていた。

けれども、描かれる自然現象や心的変化が、ともかく時系列に沿って、いわば進り出るように喚起されると、そこから読者は言い知れない感動を覚える。また、そこにおいては、先行する言説との歴然としたコントラストも浮かび上がってくる。すなわち、叙述方法における対照性が読者の心に絶大なインパクトをもたらす。「停止」も「割愛」も「整理」もなされない時間の進りが読者の胸に迫ってきて、その心を揺さぶる。

II テクストの分析

本断章においては、1～21行目で、ル・ブルギニオン男爵の挿話が語られている。「この豪華と退屈のなかにいて、ジュリヤンが興味をもったのは、ラ・モール氏だけだった」（16～17行目）とあるが、この1文がそのエピソードの結論である。そこにおいては、好漢としてのラ・モール侯爵と、その有能な秘書としてのジュリヤンとの関係が示唆されている。換言すれば、言説のこれから先に向かう結節点が築かれている。

ル・ブルギニオン男爵自身は、この断章で、ラ・モール侯爵夫妻の娘のマ

チルドによって嘲弄的にされる役柄に止まる。マチルドによって揶揄されるだけの人物という権能を超えることはなく、物語の結節点にはならない。

もっとも、このル・ブルギニョン男爵のエピソードは、『赤と黒』の時間の流れを暫し停止させている。また、本断章の全体においても、時間がやや停止しているとの感が否めない。それは、パリのサロンの1断面という主題に、ここの断章の多くが充てられているからである。

それでも、ここの叙述には「ある日のジュリヤン」を物語る側面もある。「ある朝、侯爵の図書室で、ピラル神父がジュリヤンと一緒に、相変らずけりのつかない、例のフリレールとの訴訟の一件を調べていたとき、ジュリヤンが突然いった」（22～24行目）で始まるジュリヤンとピラル神父との会話と、ラ・モール嬢の「きき耳」（42行目）というハプニングがそこには含まれている。これらは、ストーリーの時間の流れに沿った記述である。もっとも、この会話とハプニングは、物語展開のこの場所に位置づけられねばならないという必然性をそれほど強くは帯びていない。駆け出しの秘書としてのジュリヤンの姿、および、ジュリヤンに関心を寄せるマチルドの心の動きの、それぞれ1例を描いているに過ぎないという、距離を置いた見方にも、幾許かの理が認められるからである。

しかし、ジュリヤンとマチルドの馴れ初めを語る役割を、この箇所は担っている。その意味では、ここにおいて、1つの結節点が忍び込んでいこうべきである。

ラ・モール嬢がきき耳をたてていたのを見て、ジュリヤンは顔を赤くした。彼女は本を取りにきて、すっかり聞いてしまい、ジュリヤンに多少の敬意をいただいた。《このひとは生れつきむやみと頭を下げるようなひとじゃない。このおいぼれの神父さんとはわけが違う。まあ、この神父さん、なんてみっともないんでしょう！》

（42～46行目）

ここの断章では、ジュリヤンの1日を描きながらも、パリのサロンの有り様に描写の眼を注ぐという、多分に両面価値的な記述法が採られている。その結果、ジュリヤンの1日の喚起と侯爵夫人のサロンの描写とが密接に交錯してい

る。後者では、物語展開のうえでの時間の流れが淀んでいる。あるいは、後者は、これからのストーリーの進展を用意する布石、ないしは、背景を読み手に提供する機能を負っている。新参者のジュリヤンという存在をそこに絡ませることによって、時間の流れを完全には停止させずに、ラ・モール侯爵夫人のサロンという空間的事象を語り手が描いて見せているとえば、正鵠を得られるだろう。

*

本断章の最終段落の出だしにはこうある（57～60行目）。

ほとんど毎夜、侯爵夫人の大きな肱掛椅子の陰で小さなグループをつくる連中がいるが、ラ・モール嬢はこの中心だった。集まるのはクロワズノワ侯爵、ケーリュス伯爵、リュス子爵その他、二、三の若い士官で、いずれもノルベールかその妹の友達だった。

ここに登場する「クロワズノワ侯爵」「ケーリュス伯爵」「リュス子爵」が、『赤と黒』のこの箇所ではじめて登場する人物群であることは歴然としている。だから、われわれにとって、彼らのいずれもが十分な情報に潤っていない。言い換えれば、彼らの過去が少しも語られていない。われわれ読者には、この貴族たちの登場が煩わしく感じられるとは言わないまでも、無味乾燥なこれらの人物のいずれにもわれわれは感情移入をなし得ない。もっとも、63～64行目には「こんなつまらない場所を、取巻き連のだれもが羨んでいた」との1文がある。それでも、彼らの1人ひとりの個性が滲み出てこない点では、その間の事情に変わりがない。

したがって、彼らの立場は、ジュリヤンのそれと対蹠的である。彼らは「連中」という範疇で一括りにされているので、なおのこと読者によるこれらの登場人物との同化が困難である。ただし、新参者のジュリヤンと「連中」との対照は際立っている。

ジュリヤンはこの小さなグループの連中の話を聞いて、心から笑いだすことがよくあったが、この連中のいっているようなことを考え出すことなど、自分にはできないと思っていた。わかるにはわかっても、話すことのできない外国語のようなものだった。

（68～72行目）

このコントラストは、マチルドを巡っての、ジュリヤンと彼らの確執の可能性を予告するものだと見ても、あながち無理ではない。明敏な読者であれば、それを察知するはずである。はたして、61～64行目には「この長椅子のはしに、派手なマチルドのすわっている椅子と向き合って、かなり低い小さな藁椅子にジュリヤンが黙りこくってすわっている。こんなつまらない場所を、取巻き連のだれもが羨んでいた」とある。羨望が確執にまで発展する可能性がここで示唆されている、あるいは、予告されていると見ることは、小説文の「経済的構築性」の観点からも妥当である。もっとも、実際には、果たし合いにまで関係が激化することはない。

これら有象無象の「連中」と比べれば、マチルドに関する情報の量は多いので、読者が彼女に自己を同化する余地は小さくない。先に取り上げた、図書室での「きき耳」（42行目）のエピソード以外にも、その日の晩餐のときの様子が次のように喚起されている。

晩餐のとき、ジュリヤンは思いきってラ・モール嬢の顔を見ることさえできなかったが、令嬢のほうは親切にも言葉をかけてくれた。この日は大勢の客が来ることになっているので、令嬢はジュリヤンにも居残っているようにとすすめた。

（47～50行目）

あるいは「小さなグループ」の素描のなかには、次のような件がある。

その日は、ラ・モール嬢から、ブザンソンの城塞のある山はどのくらいの高さがあるのだろうかときかれた。その山がモンマルトルより高いのか低いのか、ジュリヤンにはまるっきりわからなかった。

（65～68行目）

ここの断章のなかで、3度にわたってジュリヤンに好意的な発話をするマチルドであるだけに、われわれ読者は、今後の2人の関係がいかに進展するかに興味を掻き立てられずにはいられない。彼らをめぐって、いわゆる「期待の地平線」が立ち現れるわけだ。語り手が彼ら2人に関することへと言説を集中させ、それ以外の人物は有るか無しかの描写の対象となるに過ぎないであろうこ

とが、本断章からは如実に窺い知れる。

*

このテキストの最初の21行が、「あの気の毒なル・ブルギニョンの昇進」(17～18行目)について語っていることを、われわれはすでに指摘した。この人物を軸にして、ラ・モール侯爵夫人のサロンの雰囲気や有り様を読者は垣間見る。

けれども、ル・ブルギニョン男爵は、ここにおいて点括的に登場するだけである。だから、先に述べたように、この男爵は『赤と黒』全編を射程に入れた場合の結節点にはならない。

それに対して、マチルドにあっては事情が全く異なる。男爵は簡単に素描されているだけだが、マチルドに関しては念入りの描出が行われている。その描出は3つの場面に整理されている。「図書室」「晩餐」「小さなグループ」がそれである。この内、最も意味深長なのは「図書室」の場面である。

ジュリヤンとピラル神父の会話を、2人に気取られずに聞いたマチルドであったが、ふと物音を立ててしまう。39～46行目に、その経緯が述べられている。

ピラル神父はまったくの成上りもので、大貴族と晩餐を共にすることは光栄の至りだと思っている。自分の気持を一生懸命ジュリヤンにわからせようとしていると、軽い物音がしたので、ふたりはふりむいた。ラ・モール嬢がきき耳をたてていたのを見て、ジュリヤンは顔を赤くした。彼女は本を取りにきて、すっかり聞いてしまい、ジュリヤンに多少の敬意をいただいた。《このひとは生れつきむやみと頭を下げるようなひとじゃない。このおいぼれの神父さんとはわけが違う。まあ、この神父さん、なんてみっともないんでしょう！》

この引用箇所の最後に布置されているマチルドの内的独白は、時間の観点からすれば、文脈中に入り出ている。これは「独白」という形態に内在する現象である。もっとも、25～38行目のジュリヤンとピラル神父との「対話」についても同様のことが言える。つまり、この図書室の場面には、語り手の深甚な思いが込められている。われわれは、この場面からある程度の神話性を感じ取

らずにはいられない。

全体的に見れば、本断章は、種々の情報をわれわれ読者に提供する機能を果たしている。専らストーリーの展開に関心を寄せる読者であれば、読み飛ばしてしまうような言説である。しかし、「図書室」でのエピソードだけは、至って臨場性に富んでいる。また、ジュリヤンとマチルドの2人の関係が、このエピソードにおいて結節点を見出してもいる。「ラ・モール嬢がきき耳をたてていたのを見て、ジュリヤンは顔を赤くした。彼女は本を取りにきて、すっかり聞いてしまい、ジュリヤンに多少の敬意をいただいた」（42～44行目）とある。どのような傾向の読者であろうとも、高慢な美女であるマチルドがジュリヤンに「敬意」を抱くこの箇所には、刮目するに違いない。

Ⅲ まとめ

本テキストはパリの社交界を描いている。それと同時に、主人公ジュリヤンの1日という通時的出来事にも言及している。反復的内容と突発的内容の2つを絡めることによって、語り手はわれわれ読者の関心を惹きつけようと目論んでいる。

このような二重性は、小説文ではあまり見られない様態である。パリの社交界についての情報を提供する共時態に立ちつつも、語り手は、われわれの主人公の挙動に注視を怠らない。単に「図書室」でのエピソードに限ったことではなく、社交界がどのようにジュリヤンの眼に映るのかという視点にも語り手は立っている。結局のところ、読者は、この断章を通じて終始ジュリヤンの視点に身を置く。

そのなかで異彩を放つのがマチルドの存在である。「晩餐」と「小さなグループ」で彼女がジュリヤンに言葉を掛けるのに先立って、「図書室」でのエピソードが出来するが、この挿話での「きき耳」は多分に小説的である。つまり、偶然性が支配的なフィクションに似つかわしい出来事だ。読者に驚きを喫させるといふ、小説の主目的に適った件である。

パリのサロンという空間的要素を背景にして、ジュリヤンとマチルドの馴れ

初めがもっともらしく描き出されている。退屈なサロンの空間描写に絡まるように、彼らの触れ合いが、「図書室」「晚餐」「小さなグループ」の3つの場面にわたって、ストーリーのなかに導き入れられている。サロンが退屈さきわまりないものであるだけに、これらの出来事が鮮明に浮かび上がってくる。また、彼らの関係が3つの場面に整理されていることも、2人の恋仲の予感を強制的に表象している。

第9章 ふたたび話法

● 前章からの梗概

下掲の文章箇所は、1830年の5月から6月にかけての頃に当たると推定される。ジュリヤンがラ・モール侯爵の秘書になってから半年以上が経った。いまでは、方々の領地の管理や一切の手紙の代筆を任せられる、侯爵にとって重宝な補佐役になっている。一方、マチルドは、冬のあいだ母親と南仏の避寒地に行っていたが、4月に帰宅してジュリヤンの垢抜けした物腰に驚く。そして、社交界の退屈さに我慢できなくなっていた才媛マチルドは、自分に求愛する卑屈な貴族の子弟よりも、知性が豊かで、性格が高潔で、自分に対して決して媚びることのない平民ジュリヤンへと次第に傾倒する。彼女のそうした接近に、ジュリヤンのほうも慎重に応え始めつつある。

● テクスト（下巻129頁17行目～132頁17行目）

高飛車でしかもひどく気楽な態度を見せるこの令嬢と話すのが、ジュリヤンにはだんだんおもしろくなってきた。彼は平民の反抗児という自分のいやな役割を忘れた。ラ・モール嬢をもの知りだとも思い、わけのわかる女だとも思うようになった。彼女が庭でいう意見と、サロンで口にする意見とは、まるで違っていた。ときどき、ジュリヤン 5
に対して、感激してみせたり、率直に出たりするが、それは、あれほど横柄で冷やかなふだんのそぶりとは、まったくうって変っている。

ある日、ラ・モール嬢は、ひらめく考えと感激に眼を輝かせながらいった。

「宗教戦争時代は、フランスの英雄時代だったのですわ。あのころは、10
だれもが自分の望んでいるものを手にいれようとし、自分の党派を勝
たせるために戦っていたのですもの。あなたのお好きなナポレオンの
時代のひとみたいに、勲章をもらおうなんて、さもしい気持はありま
せんでしたわ。利己主義的なところもけちくさいところもすくなかつ
たと思いますわ、そうじゃありません？ あたしはあの時代が好きで 15
すわ」

「それに、ボニファス・ド・ラ・モールはその時代の英雄でしたからね」
「すくなくとも、愛されてましたわ。あんなふうに愛されたらおそら
く楽しいでしょうね。今生きている女のひとで、斬られた恋人の首に、
平気で手をふれることのできるひとがいるでしょうか？」 20

ラ・モール夫人が娘を呼んだ。偽善は隠しておかなければ、役にた
たない。ところが、見られるとおりに、ジュリヤンはナポレオン崇拜の
気持を、ラ・モール嬢に半ば打ち明けてしまっている。

《今いった点じゃ、あの連中はおれたちとは比べられないくらい有利
なんだ！》と、庭にひとり残されたジュリヤンは考えた。《祖先の歴史 25
史のおかげで、あの連中は卑俗な感情から超然としていられる。それ
に、しょっちゅう食うことを考えていなくてもすむのだ！ それにひ
きかえ、なんたるみじめな話だ！》と、ジュリヤンは苦々しげにつけ
加えた。《おれなんかはこういう大きな問題について論じる資格など
ない。おれの生活は偽善の連続にすぎない。パンを買うための年収千 30
フランがないからなのだ》

「なにをを考えてらしたの？」と、マチルドが走りながら戻ってきて、
きいた。

ジュリヤンは自嘲にあきあきしていた。自尊心から、自分の考えを
率直に打ち明けた。こんな金持の女に自分の貧しさを話すのかと思う 35
と、はずかしくてしかたがなかった。彼は誇りを見せて、自分はなに
も求めてはいないのだということを、相手にはっきりわからせよう
とした。マチルドには、ジュリヤンがこれほど美しく思えたことはな

かった。いつものジュリヤンには見られない、感じやすさと率直さが認められたからである。

40

それからひと月とたたないころのことだが、ジュリヤンはラ・モール邸の庭を、もの思いにふけりながら、散歩していた。だが、その顔には、片時も忘れない劣等感からくるけわしい表情や、学者ぶった横柄さは、もはや見られなかった。ラ・モール議をサロンの入口まで送っていったところだった。彼女は兄と駆けっこをして足を痛めたというのである。

45

《ずいぶん妙な格好をして、おれの腕にすがってきたものだ》と、ジュリヤンは考えた。《おれのうぬぼれか、それとも、ほんとにあの娘はおれに気があるのかな？ おれが自尊心から苦しんでいることをぶちまけるときでも、ひどくやさしい態度で聞いてくれる！ だれに 50 対してもあんなに気位の高いところを見せる女だのに！ サロンの連中はあの娘があんな顔つきをするのを見たら、きっと驚くだろう。たしかに、あれほどやさしい善良な様子は、だれに対しても見せたことがないんだ》

ジュリヤンはつとめて、この風変りな友情を誇張して考えまいとし 55 た。自分のほうから、この友情を、武装通商に似ているときめていた。毎日顔を合わせても、前日の親密に近い態度を取り戻すまでは、「今日は味方か敵か」とさぐり合うようなものだった。この横柄な娘に一度でも侮辱されてひっこんでいたら、なにもかもおしまいだということは、よくわかっていた。《仲たがいするくらいなら、はじめっから、 60 おれの自尊心の正当な権利を守る態度に出たほうがいいのじゃないだろうか？ おれが誇りをすこしでも忘れたら、すぐに軽蔑してかかってくるわけだ、そうなってから反撥してみたところではじまるまい》

不機嫌な日には、マチルドはしばしば、貴婦人のような態度でジュリヤンに臨もうとした。それもなかなかやり口がうまいのである。だ 65 が、ジュリヤンは容赦なくはねつけた。

ある日、ジュリヤンはいきなり言葉をさえぎっていった。「お嬢さ

まはお父さまの秘書に、なにかおいいつけになりたいことがおありな
のでしょうか？ おいいつけは拝聴し、つつしんでこれを果すのが秘
書の役目でございますから。それに、秘書としましては、お嬢さまに 70
なにも申し上げることはないわけでございます。自分の思っているこ
とをお嬢さまに申し上げるために、お給金をいただいているわけでは
ございませんから」

I 『読み解く』第9章の概念装置

話法的言説が、文脈のなかで独立的に用いられる場合には、強い印象効果が醸し出される。例えば、それによってストーリーの急変が告げられることがある。『読み解く』第9章のテキストで、馬丁のマリウスがジャンヌの母の重態を告げに、彼女の許に走り寄ってくる場面を想起しよう。

このマリウスの直接話法と比べれば、臨終を告げるダンチュ後家の言葉は、少なくとも表面的にはあまり劇的ではない。むしろ、多分に隠微な性質を帯びている。けれども、そのことがかえって読者の受ける印象を強いものになっている。見識者の言葉は、しばしば静かな口調で述べられ、しかも、聞く者を承服させる圧倒的な力を有するからだ。ダンチュ後家の言葉もまた、それに類する力を具備していると見られる。

台詞が独立的に用いられ、それが浮き彫りにされるという文体的手法そのものに、読者が受ける印象の永続性を保つ効力がある。あからさまな事実を告げ知らせることによって、先行する文脈の内容に決定的な終止符を打つという布置である。文章のなかで、その類いの台詞は、そのぶん鮮明に浮かび上がる恰好になっている。

この種の独立的話法は、往々にして脇役的な登場人物たちによって口にされる。ストーリー展開のうえで重要な登場人物は、その変化変容が因果関係の連鎖に沿って逐次的に述べられる。その限りでは、主役の言葉は、ストーリーの急変を告げるのには不向きである。つまり、発話行為の点でドラマチック性を帯びるのは、むしろ、脇役や端役が口にする言説のほうである。

次に、複数の話法が重なって出てくる場合として、登場人物、それも多くのケースでは主人公の物思いが、種々の話法形式によって具現化される点を取り上げよう。それらの話法形式とは、語り手のコメント、内的独白、内的言説である。これらのうち、内的独白と内的言説の差異については、前者が登場人物の内面で既に言葉として分節化されているのに対して、後者は、言葉として分節化される以前の登場人物の心理を語り手が代わって述べていることが挙げられる。このように、物思いの喚起にバリエーションを持たせることで、語り手はストーリー展開を滑らかにしている。登場人物が独りである際には、連続する話法は、このように自然で自由な思念という様相を呈する。

登場人物が複数いる場面はどうであろうか。その場合には、しばしば彼らのあいだの対照が強調される。2人のうちの一方が衝動的な口振りであるのに対して、他方が落ち着き払って話しているなどの場合がそうである。『読み解く』第9章の断章での、ジャンヌとピコ神父の言葉に認められる差異が想起される。

さらに、地の文は、直接話法との関わりのおかげで、2種類に分けられる。直接話法のコメントとして機能する地の文と、直接話法と関係を持たない地の文の2つである。

前者は、直接話法と、それ以外の文章箇所とのあいだに、内容や語調のうえでの統一性を確保する働きをする。例えば「彼女は目を血走らせて訊いた」との地の文が直接話法に先立って布置されている場合には、読者は発話様態を想像する労を免れる。この手法は小説文にあっては常套的であり、それを戯曲から截然と区別している。

直接話法と関係を持たない地の文のほうは、3つに区分けされる。登場人物の沈黙を表す部分、登場人物の発話の可能性を示唆する部分、登場人物の心理や言動と無関係な部分の3つである。このうち最後のものは空間描写に代表される。もっとも、空間描写は、多くの場合、それ以外のところと対照を成したり同調したりするのであって、純粹に自立的な描写であることは稀である。

登場人物が沈黙している箇所には、その人物が多幸感に浸っている場合と、不安を抱えている場合の2つが認められる。また、登場人物の発話の可能性を示唆する箇所は、便宜的色彩が濃い。その箇所で遣り取りされたであろう言葉

は、プロットをスムーズに進展させるために、語り手によって惜しげもなく削除される。

II テクストの分析

本断章の8～40行目は、「ある日」のジュリヤンとマチルドの対話を取り上げている。そこでは話法が連続的に用いられている。それとは逆に、次に掲げる67～73行目では、ジュリヤンの言葉が独立的に布置されている。

ある日、ジュリヤンはいきなり言葉をさえぎっていった。「お嬢さまはお父さまの秘書に、なにかおいつけになりたいことがおありなのでしょうか？ おいつけは拝聴し、つつしんでこれを果すのが秘書の役目でございますから。それに、秘書としましては、お嬢さまになにも申し上げることはないわけでございます。自分の思っていることをお嬢さまに申し上げるために、お給金をいただいているわけではございませんから」

この引用箇所の出だしの1文「ある日、ジュリヤンはいきなり言葉をさえぎっていった」においては、不機嫌なときのマチルドの長広舌と思しい言葉を、「自尊心」（34行目・49行目・61行目）の強いジュリヤンが唐突に遮る様子が描かれている。そして、そのあとに、マチルドを圧倒するジュリヤンの冷やかな言葉が記述されている。その言葉は、ラ・モール侯爵の秘書として自分は働いているのであって、その令嬢のマチルドに「自分の思っていること」を申し述べるためにラ・モール邸に滞在しているのではない、というきっぱりとした応答である。けだし、これは、「貴婦人のような態度でジュリヤンに臨もうとする」（64～65行目）マチルドを、ジュリヤンが「容赦なくはねつける」（66行目）好例である。われわれ読者の胸に永続的に残るであろうジュリヤンの言辞だ。高慢な娘の話を一思いに遮っている。

見られるように、ここの箇所は、2人の確執をジュリヤンが一刀両断にする点で独立的である。後方文脈にいきなり終止符を打つ、ジュリヤンの独立的な話法である。そこではジュリヤンの機転が面目躍如としていて、あくまでもジュリヤンのほうがマチルドより一枚上手であることが窺える。読者はそこに

一種の爽快感を覚える。それと言うのも、われわれは、終始ジュリヤンに感情移入を行っているからである。彼の言動や心理に自己を同一化して、その生活を追体験しているからである。けだし、ジュリヤンは、この小説における目覚ましいヒーローに他ならない。

つまり、語り手はその言説において主としてジュリヤンの視点を取り上げている。55行目からの1段落もそうである。

ジュリヤンはつとめて、この風変りな友情を誇張して考えまいとした。自分のほうから、この友情を、武装通商に似ているときめていた。毎日顔を合わせても、前日の親密に近い態度を取り戻すまでは、「今日は味方が敵か」とさぐり合うようなものだった。この横柄な娘に一度でも侮辱されてひっこんでいたら、なにもかもおしまいだということは、よくわかっていた。《仲たがいするくらいなら、はじめっから、おれの自尊心の正当な権利を守る態度に出たほうがいいのじゃないだろうか？ おれが誇りをすこしでも忘れたら、すぐに軽蔑してかかってくるわけだ、そうなってから反撥してみたところではじまるまい》

ここでも、前掲の引用箇所とよく似た結構が見て取れる。マチルドとの友情を「武装通商」のようだと受け止めているジュリヤンの気持ちを、終わりの三、四行の内的独白が具現化している。あるいは、反復的に言い表している。いずれにしても、この時期のジュリヤンの心境が、われわれ読者には手に取るようにわかる。

*

10～20行目は、ジュリヤンとマチルドの対話である。もっとも、ここで主に喋っているのはマチルドであって、ジュリヤンは「それに、ボニファス・ド・ラ・モールはその時代の英雄でしたからね」という合いの手を入れているにすぎない。

コントラストが輝き出るのは、この対話と、そのあとに続くジュリヤンの内的独白とのあいだである。

《今いった点じゃ、あの連中はおれたちとは比べられないくらい有利なんだ！》と、庭にひとり残されたジュリヤンは考えた。《祖先の歴史のおか

げで、あの連中は卑俗な感情から超然としていられる。それに、しょっちゅう食うことを考えていなくてもすむのだ！ それにひきかえ、なんたるみじめな話だ！》と、ジュリヤンは苦々しげにつけ加えた。《おれなんかはこういう大きな問題について論じる資格などない。おれの生活は偽善の連続にすぎない。パンを買うための年収千フランがないからなのだ》
(24～31行目)

ここでは、平民の自分が抱く劣等感と引き比べて、侯爵一家をはじめとする貴族たちが持つ気高さを羨む、ジュリヤンの心理が描かれている。「祖先の歴史のおかげで、あの連中は卑俗な感情から超然としていられる」とある。この超越性に対して、根深いコンプレックスをジュリヤンは抱いている。

また、金銭面においても、貴族たちに対する彼の劣等感は深刻である。「おれの生活は偽善の連続にすぎない。パンを買うための年収千フランがないからなのだ」と憤慨するジュリヤンである。ここには誇張が含まれている。本稿第8章の「梗概」にあるように、ジュリヤンの年給は実際には2千フランである。それとも、「パンを買うための年収千フランがないからなのだ」は、当節の決まり文句だったのであろうか。あるいは、『赤と黒』の語り手は、細部に捕られない自由奔放な文章家なのであろうか。

いずれにしても、ここでのジュリヤンのコンプレックスが、自分とマチルドの社会的立場のうへの懸隔に基づいていることは明白である。連続する対話と内的独白を通じて、貴族たちと平民の自分とのあいだにある溝の深さを、ジュリヤンは痛烈に受け止めている。

ところで、小説の文章は、直接話法や内的独白の単なる羅列であってはならない。いわゆる「経済的構築性」の美点が損われてしまうからである。その理由から、例えば34行目からの1段落では、端折ったような言い回しが多く用いられている。

ジュリヤンは自嘲にあきあきしていた。自尊心から、自分の考えを率直に打ち明けた。こんな金持の女に自分の貧しさを話すのかと思うと、はずかしくてしかたがなかった。彼は誇りを見せて、自分はなにも求めてはいないのだということを、相手にはっきりわからせようとした。マチルドに

は、ジュリヤンがこれほど美しく思えたことはなかった。いつものジュリヤンには見られない、感じやすさと率直さが認められたからである。

この場面でジュリヤンがマチルドに対して言ったであろう具体的な言葉は、全て地の文のなかに織り込まれている。そうすることで、語り手は物語のテンポを軽やかにしている。

2人の関係の描出が軸となって進展している件なので、ここの断章には、自由で自然な物思いは存在しない。けれども、ここのテキストでもまた、語り手は、種々の話法を用いることによって、叙述を滑らかでスピーディーなものに仕上げている。

*

本断章の第1段落は、登場人物の発話の可能性を示唆する言説である。

高飛車でしかもひどく気楽な態度を見せるこの令嬢と話すのが、ジュリヤンにはだんだんおもしろくなってきた。彼は平民の反抗児という自分のいやな役割を忘れた。ラ・モール嬢をもの知りだとも思い、わけのわかる女だとも思うようになった。彼女が庭でいう意見と、サロンで口にする意見とは、まるで違っていた。ときどき、ジュリヤンに対して、感激してみせたり、率直に出たりするが、それは、あれほど横柄で冷やかなふだんのそぶりとは、まったくうって変っている。

ジュリヤンに傾倒しつつあるマチルドの言動と、そういう彼女に冷淡ではないジュリヤンの姿が、ここの件には素描されている。そして、その例として、10～20行目の2人の対話があとに続いている。このような結構は、直接話法に関してストイックであって、だから、読む者を飽きさせない。仮に第1段落で直接話法が用いられている場合を想定してみるならば、そこでは冗長さが免れ得ないのは歴然としている。

あるいは、この第1段落は、10行目からの2人の対話を導入する機能を果たしているとも見られる。つまり、10行目からの対話を、「高飛車でしかもひどく気楽な態度を見せるこの令嬢と話すのが、ジュリヤンにはだんだんおもしろくなってきた」などの具体例だと見なすことができる。地の文の例証として対話が機能している。

そういう観点からすれば、8～9行目の「ある日、ラ・モール嬢は、ひらめく考えと感激に眼を輝かせながらいった」という直接話法導入箇所は、無くもがなの言葉だとも言える。はたして、この1行余りの言葉を削除しても、文脈上の齟齬はそれほど大きくない。それでも、この導入箇所は、物語の臨場性を生み出すうえで重要な役割を担っている。すなわち、マチルドの発話様態を審らかに説明している。

これは、32～33行目の『『なにを考えてらしたの?』と、マチルドが走りながら戻ってきて、きいた』についても同断である。「なにを考えてらしたの?」と訊ねるときのマチルドの興奮状態が明白になっている。

ところで、ここのテキストには、空間描写がほとんど無い。単に「庭」「サロン」「サロンの入口」という有るか無しかの空間要素が指呼されているにすぎない。だから、見方によっては、語り手が空間軸を減していると受け止められる。けれども、「庭」と「サロン」が対立的にとらえられていることが、上掲の引用箇所から読み取ることができる。すなわち、4～5行目の「彼女が庭でいう意見と、サロンで口にする意見とは、まるで違っていた」において、「庭」が率直にものを言う場所であり、「サロン」が形式張ってものを言う場所であるという相関性を掬い出せる。

本断章に現れる空間要素の数が少ないだけに、「庭」の神話性がかえって増幅するとともに、あるいは、「庭」が実はプロットのうえでの結節点になっているとも見なすことができる。

Ⅲ まとめ

未完にして未刊であるが、筆者は1編の小説を書いたことがある。その際に気づいたのは、自分も含めて素人の物する小説文では、直接話法があまりに連続的に出て来がちだという点である。対話や会話が過度に紙幅を取りすぎてしまう。そのぶん「立体感」が生まれにくくなる。

それに対して、専門の小説家が書く作品では、直接話法と地の文がほど良い均衡を保っている。直接話法の誇示的性質が、その力を失わないとも言える。

さらには、戯曲のような言説に墮することなく、小説文が小説文としての独自の言説であり続けるとも見なすことができる。

話法という要素を美しく用いるのが、小説の語り手の存在理由の1つなのだろう。そうするためには、直接話法の使用において、語り手は禁欲的であらねばならない。そうあることで、プロットの進展を滑らかにし、そのぶん個々の直接話法の印象度を高める必要がある。

その目的のためには、地の文にも工夫が施されねばならない。もっとも、本稿で取り上げている「時間構成」「話法」「空間構成」「視点」などの種々の要素に目配りを利かせれば、それは難しいことではないかもしれない。小説は映画に似ている。映画が総合芸術だと呼ばれるのと同様に、小説も総合芸術の名に値する文芸ジャンルである。

第10章 ふたたび空間構成

● 前章からの梗概

いろんなことを議論しながら庭で散歩するのを2人が楽しむようになって暫く経ったある日、マチルドは、自分がジュリヤンに恋していると悟る。一方、ジュリヤンも、大きな青い目、身体つきの優美さ、衣装の着こなしの気品といったマチルドの美点を愛するようになる。そして、マチルドは、心の葛藤を経たうえで、自分の恋を悟ってから2箇月後には、従僕を使って恋文をジュリヤンの許に届ける。平民の自分に大貴族の令嬢がこのような手紙を書くことをにわかには信じられず、何かの陰謀かもしれないと警戒したジュリヤンは、翌朝、慎重に言葉を選んだ返事の手紙をマチルドに手渡す。すると、その日の夕刻にマチルドから次のような文面の数行の手紙を受け取る。「お話ししたいことがあるのです。今夜、お話ししなければなりません。夜中の1時が鳴ったら、庭に出てきてください。井戸のそばに園丁の大梯子がありますから、それを使ってください。あたしの部屋の窓に立てかけて、上ってきてください。月夜ですけれど、かまいませんわ」とあった。そこで、後悔したくないという気持ちから、警戒心を抱きながらも、ジュリヤンは梯子で2階のマチルドの寝室に忍び込んでいき、マチルドをものにしてしまう。そのときのジュリヤンの心は、愛情よりもむしろ野心

家的満足感に充たされていた。下掲のテキストは、その直後のマチルドの寝室での場面から始まっている。

● テキスト (下巻192頁16行目～195頁12行目)

ジュリヤンが話しているのを聞いているうちに、マチルドはその勝ち誇った顔つきが癪にさわってきた。《あたしの主人になってしまったのだわ》と彼女は思った。早くも後悔にとらわれていたのである。とんでもない気違い沙汰をしでかしてしまったと思うと、マチルドの理性はたえられなかった。できることなら、自分もジュリヤンもこの 5
世からなくしてしまいたいと思った。ときどき意志の力で後悔の気持を抑えてしまいたいと思うと、今度は気おくれと、たえられぬはずかしさから、ひどくみじめな気持になった。こんなやりきれない状態になろうとは、全然予期していなかったのである。

《でもこのひとに話しかけなければならぬわ》と彼女はしまい 10
に思った。《そうすべきものなのだから。恋人にはなにか口をきくものだわ》そこで義務を果たすために、声の調子というよりは、使う言葉のほうにずっと愛情をこめて、この数日間に、ジュリヤンに対してどう
いう態度に出るつもりでいたかを物語った。

もしいわれたとおり、園丁の梯子を使って、大胆にも自分の部屋へ 15
やってきたら、すっかり身を任せようと思っていたのである。だが、こんな愛情のこもったことがらを、これほど冷やかな、これほど丁寧な口ぶりで話す人間があるだろうか？ それまではこの密会はおよそ冷やか
かだったのである。まるで恋愛を目の敵にしているようであった。軽はずみな娘にとってなんといういいこらしめであろう！ これだけの 20
ひととりのために、自分の未来を台なしにする価値があるだろうか？

浅薄な観察者にとっては、はげしい憎悪のあらわれと思われたかもしれ 15
ないし、そのくらい、女が生れながらに持っている誇りというものは、これほど固い意志にさえなかなか屈しないものであるが、
こうしてずいぶん思い悩んだあげく、マチルドはやっとジュリヤンに 25

対してやさしい恋人の姿を見せた。

もっとも、ふたりが味わった陶醉には、いささか意識的なところがあつた。情熱的な恋愛が現実の姿であるというより、むしろまねるお手本だったのである。

ラ・モール嬢は自分自身に対しても、また恋人に対しても、一つの 30
義務を果すような気持でいた。《かわいそうに、このひとはこんなに
大胆なふるまいをしたんだもの、幸福にしてあげなければいけないわ。
でなければ、あたしのほうが意気地なしということになる》だが、こ
んなやりきれない立場から逃れることができるなら、一生不幸な目に
あつてもいい、と置いていたにちがいないのだ。 35

こうして必死になつて自分の気持を抑えようとはしていたが、言葉
にはすこしもその気配を見せなかつた。

ジュリヤンにとっては、この一夜を台なしにしてしまうような悔恨
や自責の念は、すこしも起らなかつたが、この一夜は幸福というより 40
は、むしろ奇妙な感じがしたのだった。実際、ヴェリエールで過した
最後の二十四時間とは、なんという違いだろう！《このお上品なパリの
流儀というのは、何もかも、恋愛までも台なしにしてしまったの
だ》と彼は考えたが、これははなはだしく不当な考えかたというもの
である。

ラ・モール夫人のいる隣部屋から物音が聞えてきたので、早速マホ 45
ガニーの大きな洋服箆筒の中に押しこめられたが、その中で突っ立っ
たまま、ジュリヤンはそんな反省をしていた。マチルドが母親につい
てミサに行き、女たちがまもなく部屋を出ていってしまうと、ジュリ
ヤンは女たちが仕事を片づけに戻ってくる前に、なんなくそこを抜け
出した。 50

彼は馬に乗って、パリの郊外の森のいちばんさびしい場所へ出かけ
た。幸福というよりは、むしろ意外な気持だった。幸福感にとときどき
おそわれたが、それは何か驚くべき手柄をたてて、総司令官から一挙
に大佐に任命されたばかりの、若い少尉の幸福感のようなものだった。

昨日まで自分より高いところにあったものがすべて、今は自分の横か、55
自分のずっと下にあるのだ。先に行くにつれて、ジュリヤンの幸福は
だんだん大きくなった。

ジュリヤンの心には、なんら愛情らしいものはなかったが、それは
マチルドのジュリヤンに対する態度のすべてが、義務を果すといった
感じだったからである。この言葉がいかに奇妙に思われようとも、事 60
実はそうなのである。その夜の出来事はなに一つとして、彼女にとっ
て思いがけないものはなかった。もっとも、小説に書いてあるような、
この上もない喜びのかわりに、みじめな思いと屈辱を感じたことは別
だった。

《あたしは思い違いをしていたのかしら？ あのひとに対して愛情を 65
もっていないのだろうか》と、彼女はつぶやいた。

I 『読み解く』第10章の概念装置

小説のストーリーラインのうえでは、種々の「出来事」と様々な「状態」
とが連続的に継起する。「状態」のほうはさらに、「静的」なものと「動的」な
ものに分けられる。これらの3つの要素は、登場人物によって目撃されたり、
われわれ読者によってイメージされたりする以上、空間描写の対象であるとい
う特質を有する。例えば、『女の一生』のなかで、フルヴィル伯爵がジャン
ヌの許に血走った目つきで訪れて、妻が来ていないかと訊ねる場面では、「伯
爵が床に腰を下ろす」は出来事を、「伯爵が床に腰を下ろしている」は静的状
態を、「伯爵が幾度もハンカチで額を拭く」は動的状態を表象する。

しかしながら、これらの空間描写は、単に視覚的な喚起であるというに止ま
らない。一見すると専ら視覚で捕らえられる空間的出来事や空間的状态を描写
しているように思われる箇所であっても、そのじつ、それがストーリー展開と
緊密に結びついていることが多い。登場人物の心理や意図は直接的に説明され
ない。人物の挙動が喚起されることによって間接的に示唆される。こうするこ
とによって、語り手は読者に登場人物の内面を自らの力で見抜かせようとする。

つまり、読者は、登場人物の挙動の一つひとつの背後にある心理や意図をそのつど推し測りながら、そして、そのときどきの心理や意図が次の挙動へと結びつくのを目撃しながら、最終的な結末に至るまでの一部始終を見届ける。その結果として、いま問題となっている断章が、それだけ鮮やかに読者の脳裡に残る。

ところで、小説文で描き出される空間は、ストーリーラインのうえに登場する人物を中心点として、同心円状に存在する。

その同心円が外に広がるものであるならば、それを遠心的だと呼ぶことができる。反対に体内感覚や心理状態に言が及んでいけば、それは求心の同心円である。さらに、表情や服装などの登場人物の外表面が問題となるときには、それは表層的同心円である。

もっとも、われわれ読者は、つねに登場人物たちの空間的同心円の中心に立って、事象を知覚しているわけではない。彼らが立ち得ない位置から、その同心円を捕捉することもある。『読み解く』第10章で、フルヴィル伯爵の様子を描き出す際、語り手が「泥だらけの大きな図体に、獺の毛皮の帽子をかぶったところは、まるで何か化け物のようだった」と述べる時、われわれは伯爵とは少し離れた位置から彼の様子を眺める。このように見ると、読者は、登場人物のだれに対しても優越的な立場にあると言える。語り手の立脚地に迫るくらいの立場である。私たちは、現実の狭隘な枠を暫し抜け出して、あたかも映画を鑑賞しているように、想像的空間を自由自在に駆け巡る。有体に言えば、そのようにして日頃の憂さを晴らす。

すでに述べたが、様々な出来事と種々の状態が時間軸に沿って継起することによって、小説のストーリーは形成されていく。しかしまた、小説の語り手は、こうした時間軸のいたるところで、空間描写の同心円を描いてみせる。『読み解く』第10章での時間軸上の展開は、「伯爵が、ジャンヌの哀願にもかかわらず、不倫関係にある自分の妻とジャンヌの夫を死に追いやった」という比較的単純なものである。これに対して、空間軸の描写にはいろんな工夫が施され、個々の場面が詳細かつ印象的に描き出されている。だから、それらのシーンは、読者の脳裡に永続的に残る可能性が大きい。

例えば、不倫の仲の2人の死は、「猛烈な転落」という空間的イメージに事寄せて描かれている。社会通念のうえですでに「転落」してしまっている2人の末期が、「丘の頂上から急傾斜を転落する」という視覚的なイメージで表象されている。

大まかに言えば、時間の流れに沿った記述によって小説文は展開される。けれども、時として空間の有り様のほうに記述者は手間暇をかける。以上のことは、その歴然とした証左である。

II テクストの分析

この断章の1～21行目では、ジュリヤンとマチルドの寝物語が喚起されている。もっとも、この場合は、甘美で睦まじい囁きとはほど遠いそれである。例えば、出だしの2文は、特にマチルドの側において端的にその間の事情を指呼している。

ジュリヤンが話しているのを聞いているうちに、マチルドはその勝ち誇った顔つきが癪にさわってきた。《あたしの主人になってしまったのだわ》と彼女は思った。

ここには、ジュリヤンの「勝ち誇った顔つき」が空間的な事象として出てくる。それを見るマチルドの心中には、「後悔」の念が湧出する。以下21行目まで、マチルドの惨めな心理状態が縷々綴られている。同じ空間を共有している2人の心理的乖離が大きく、上巻で描かれていた、ジュリヤンとレーナル夫人の初夜とのコントラストが目覚ましい。

この辺りの件には、「もしいわれたとおり、園丁の梯子を使って、大胆にも自分の部屋へやってきたら、すっかり身を任せようと思っていたのである」との1文がある。「ジュリヤンが梯子を使って2階の女性の部屋に忍び込む」というモチーフは、彼とレーナル夫人の関係においても用いられていた。だから、この空間的事象は、『赤と黒』において反復の相のもとに強調されている。

このモチーフを除けば、本断章の冒頭から44行目に至るまで、2人は「静的状態」か「動的状態」かのいずれかにある。2人が同衾している場面であって、

「動的状態」のほうは、26行目の「やさしい恋人の姿」とか27行目の「ふたりが味わった陶醉」とかから想像される。

一方、51行目からの段落の冒頭には、ジュリヤンが、「馬に乗って、パリの郊外の森のいちばんさびしい場所へ出かけた」とある。はたして、自分の頭と心にあるものを整理するための行為として、読者のだれもが首肯するそれである。われわれは、自分の気持ちや思念をまとめる際に、孤独な状況に身を置くことを必要とする。だから、ジュリヤンが「さびしい場所へ出かけた」ことはもっともな「出来事」である。

また、われわれ読者は、ジュリヤンがマチルドとの交情の翌朝にどのような感慨を抱いているのかを知りたいと思う。至極当然なことである。

そのときのジュリヤンの胸中を占めているものは、「意外な気持」と「幸福感」（ともに52行目）である。

後者については、次のように述べられている。

昨日まで自分より高いところにあったものがすべて、今は自分の横か、自分のずっと下にあるのだ。先に行くにつれて、ジュリヤンの幸福はだんだん大きくなった。

（55～57行目）

ここでは、「幸福感」の内容が、まさしく空間的な比喩を用いることで具体的に表現されている。

前者については、こう述べられている。

ジュリヤンの心には、なんら愛情らしいものはなかったが、それはマチルドのジュリヤンに対する態度のすべてが、義務を果すといった感じだったからである。この言葉がいかに奇妙に思われようとも、事実はそうなのである。

（58～61行目）

自己の内面をこのように分析しているジュリヤンにとって、これから先は、この「意外な気持」をどのようにして克服するかが大きな問題となる。マチルドとの全き恋愛関係をいかにして築き上げていくかが、当面の難題になる。ジュリヤンがそれをどのように解決していくのかに、爾今、われわれ読者の関心は

集中する。

*

空間的事物は、ストーリー展開と密接に関係する場合と、ストーリーが進展するための便宜的支えとして機能するだけに止まる場合とがある。本断章および『赤と黒』のほとんどの箇所において、事物の描写は前者の部類に属する。つまり、空間的事物の喚起の面で、われわれの語り手はストイックである。それに伴って、ストーリー展開の滑らかさが際立ってくる。

ここの断章では、それと名状されていないが、重要な大道具としてマチルドのベッドが存在する。また、彼女の部屋の隣にあるラ・モール侯爵夫人の寝室に言が及んでいる。さらに、マチルドの部屋にあるマホガニーの洋服筆筒がストーリーラインのうえに出てくる。

マチルドの部屋に行くには、ラ・モール侯爵夫人の部屋を通らなければならないという屋敷の造作も含めて、これらの事物はストーリーの成立のために無くってはならないものばかりである。

それは「パリの郊外の森」についても言える。ジュリヤンは自らの思念を整理し、それを明瞭に把握するために、静かで孤独な場所を必要としたのだが、そのためには「森」が最適だと語り手は考えたのであろう。けれども、どこの「森」なのかは名状されていない。単に「森」とだけある。しかし、それが却ってこの「森」の神話性を高めている。

同じことは、「マチルドのベッド」「ラ・モール侯爵夫人の寝室」「マホガニーの洋服筆筒」に関しても言える。ストーリーラインは、それらの一つひとつに幾許かの神話性を与えている。言い換えれば、これらの事物がわれわれ読者の脳裡にロマネスクな対象として残存する。

例えば、マチルドの部屋には、ベッドと洋服筆筒以外にも、多くの事物が存在するはずである。しかし、語り手は自らのストーリーのなかにそれらを取り込みはしない。ストーリー展開にとって必要不可欠な事物にしか言を及ぼさない。時間構成のうえで重要な場面しか取り上げられないのと、事情はよく似ている。小説文が、何よりも因果関係の連鎖のうえに強固に打ち立てられる言説だと、いまさらながら再認識させられる。

こういう点では、65～66行目のマチルドの眩きが際立って雄弁である。

《あたしは思い違いをしていたのかしら？ あの一に対して愛情をもっていないのだろうか》と、彼女はつぶやいた。

この眩きは、空間の支えを何ら必要としていない。マチルドがこのときどこにいるかを、言説は等閑に付している。それだけに印象的な件だと言える。小説を読む者の脳裡では、名状されたり名状されなかったりする有象無象の空間的要素が浮かんでは消える。そのようななかで、何らの空間的要素も必要としない件は、普遍性が際立つだけに、読者がそこから受けるインパクトには多大なものがある。

ところで、ジュリヤンがマチルドの部屋に忍び込む際に使った「梯子」は、その後どうなったのであろうか。「梯子」は、立てかけられたままでは危険な存在である。不用心である。われわれのその危惧には、約30頁も隔てて、221頁3行目からの次の段落が応じている。

天才のひらめきだった。うまい理屈がつつぎと浮んだ。《これ以上不幸になるはずはない！》そう思って、梯子のところへかけつけてみると、梯子は園丁のしわざか、鎖でつないである。このとき、超人的な力でいきりたったジュリヤンは、小型のピストルの撃鉄を使って、梯子をつないである鎖の環をねじきってしまった。撃鉄はこわれた。またたく間に梯子をひっかつくと、マチルドの部屋の窓へ立てかけた。

それにしても、本断章で認められる語り手の不用意さには驚かされる。ジュリヤンもマチルドも、この大道具の処置を一顧だにもしないことに、われわれ読者は不可思議の念を禁じ得ない。園丁がラ・モール侯爵に告げ口をしたら、2人はどういう立場に陥ったことであろう。もっとも、マチルドの窓辺へと上ってきた梯子を始末するジュリヤンの行動などを記述しては、ここの断章のロマネスク性が殺がれてしまう。小説は散文で記されるが、いわゆる「散文的」な内容が混入することは、それによって文学的薫りが滅殺されるので、避けなければならないことである。

*

空間の同心円の把握については、1～44行目とそれよりあとの箇所は、遠心

的および表層的同心円において著しく異なっている。前者ではマチルドの部屋が扱われている。また、彼女とジュリヤンは同衾している。だから、2人は、遠心的にも表層的にも空間を共有している。

後者では、2人はそれぞれ別個の空間にいる。マチルドは母親とともにミサに出かけたのだし、ジュリヤンはパリの郊外の森へと馬を走らせた。遠心的ならびに表層的同心円の共有は絶たれている。

けれども、このような空間の扱われ方の相違を超えて、求心的同心円の有り様からは、ジュリヤンとマチルドの間で類似性が認められる。すなわち、当夜の交情について、2人とも意外性を感じている。

ジュリヤンの心には、なんら愛情らしいものはなかったが、それはマチルドのジュリヤンに対する態度のすべてが、義務を果すといった感じだったからである。この言葉がいかに奇妙に思われようとも、事実はそのなのである。その夜の出来事はなに一つとして、彼女にとって思いがけないものはなかった。もっとも、小説に書いてあるような、この上もない喜びのかわりに、みじめな思いと屈辱を感じたことは別だった。

(58～64行目)

ジュリヤンとマチルドの双方の求心的同心円において、幻滅の色が濃厚である。マチルドは「義務」を果たしていたのだし、そのためにジュリヤンの心には「愛情」が芽生えなかった。「小説に書いてあるような、この上もない喜び」は、2人の間にはなかった。だから、マチルドの心に残ったのは「みじめな思いと屈辱」でしかない。レーナル夫人の場合とのコントラストが際立っている。

夫人は、邂逅の瞬間から、ジュリヤンへの自らの愛情に没頭していた。それに対してマチルドは、矜持のあまり、ジュリヤンが自分の「主人」（2行目）になったことに反発を感じている。

この先、ジュリヤンがいかにして彼女の「誇り」（23行目）を屈服させるかが、われわれ読者の「期待の地平線」に立ち現れる。ラ・モール侯爵の娘であるマチルドの存在が、侯爵の秘書であるジュリヤンの生活を波瀾に富んだものにするはずだとの予感が、澎湃として読者の胸に湧き起こる。

ところで、求心的同心円の描写は、マチルドの側において細やかである。特

に、その同心円は、表層的なそれとの差異が際立っている。例えば、30～37行目にはこうある。

ラ・モール嬢は自分自身に対しても、また恋人に対しても、一つの義務を果すような気持でいた。《かわいそうに、このひとはこんなに大胆なふるまいをしたんだもの、幸福にしてあげなければいけないわ。でなければ、あたしのほうが意気地なしということになる》だが、こんなやりきれない立場から逃れることができるなら、一生不幸な目にあってもいい、とっていたにちがいないのだ。

こうして必死になって自分の気持を抑えようとはしていたが、言葉にはすこしもその気配を見せなかった。

内面と外観のこのような二重性は、才媛マチルドの「理性」（5行目）の強靭さを例証する。爾今、ジュリヤンが彼女の理性を抑え込んで、その心を自分への情愛で満たすのに、いかにして成功するのかしないのか。明敏な読者であれば、その点を注視していくことになる。

Ⅲ まとめ

空間的事物がストーリー展開のうえで必要最小限なものに厳しく限られると、小説の物語性がスピーディーになったり、登場人物の心理の描写が克明になったりする。他ならぬ『赤と黒』は冒険小説であり、同時に心理小説でもある。これらの特質を前にして、空間描写がむしろ軽視されるのは、止むを得ないことなのかもしれない。

もっとも、そうであるからこそ、本断章に出てくる事物や、ジュリヤンが事後の朝に出かけて行く「森」が、読者の脳裡にくっきりと残る。稀少であるからこそ価値を増す宝石のようだと、譬えて言うこともできるだろう。このテキストに出てくる事物や空間は、どれを取り上げても、そういう意味での神話性を強く帯びている。

また、空間が簡勁な筆致で表されているからこそ、ストーリーも鮮やかなものに仕上がっている。あるいは、ジュリヤンとマチルドの心理が鮮明に表現さ

れている。空間要素の取り扱い方が、小説文の魅力と深く関わっている所以である。

映画では大道具や小道具が綿密である。いわば映画は具象的である。それに対して、小説は抽象的であり得る。単に「森」と記されるだけで、それぞれの読者は自由に1つの「森」を空想する。「梯子」とあれば、どのような「梯子」を思い描くかは、読者の勝手である。このように具象性が排されている点は、『赤と黒』の大きな特徴である。だからこそ、この小説のストーリーの迅速さに読者は魅了される。

第11章 ふたたび視点

● 前章からの梗概

最初の密会のあと、マチルドは、自尊心からたちまちジュリヤンに対して冷淡で高慢な態度に出る。そして、3日後には、口論の果てに2人は永遠の絶交を宣言する。もっとも、その直後、却ってジュリヤンは自分が彼女を本当に愛していることを悟る。2日後、マチルドの投げかけた侮辱の一言に我を忘れたジュリヤンは、装飾用の剣を思わず手に取ってしまう。彼は即座に自制心を取り戻し、剣を元の場所に置き直すが、そうした衝動的仕草はマチルドの眼には魅力的に映る。そのような経緯があった半月後の夜中の1時頃、マチルドに愛されなくなったという思いから不幸の底にあったジュリヤンは、勇気を奮い起こして梯子でマチルドの寝室に忍び込む。たまたまジュリヤンに対する恋心をふたたび抱きはじめていたマチルドも、素直に彼に身を委ね、この2度目の密会において、2人は筆舌に尽くせないほどの幸福を味わう。別れ際には、マチルドがジュリヤンに自分の髪の毛の1房を与えるほどであった。ところが、その翌日にはもう後悔の気持ちからマチルドは冷淡な態度に戻ってしまう。さらに、数日後のある朝、マチルドはジュリヤンの持っていそうな自惚れを悉く突き崩そうとして、憎しみも露に彼に罵倒の言葉を浴びせかける。以下の箇所は、激昂するマチルドからジュリヤンがようやく逃れ去った直後の、彼女の心理描写から始まっている。

● テキスト（下巻235頁2行目～237頁17行目）

マチルドは思いきり自尊心を満足させることができ、せいせいしたという気持だった。これで、完全に手を切ることができた！ あんなにはげしいのぼせかたをしたのに、それをきれいに処理できたと思うと、いいしれぬ喜びを感じた。《これであの生意気なジュリヤンも、今度こそ思い知るだろう。あたしを支配する力なんかありゃしないし、5
これからだって支配できないってことが》彼女はそれがあまりにもうれしかったので、このときはもう恋心がなくなっていた。

ジュリヤンほどの情熱家でなければ、こんな無惨な、屈辱的な目にあわされたら、このうえ恋心などがもてるはずはない。ラ・モール嬢は片時も令嬢としての慎みを失うことなく、相手の気を害する言葉ばかり浴びせかけた。それに、相手が冷静になって考え直しても、いちいちもともとだと思われるほど、巧みに計算したうえでふるまったのだった。 10

まことに意外なくってかかりかたなので、ジュリヤンがまず結論として考えたのは、マチルドの自尊心にはとめどがないということだった。 15
ふたりのあいだが、もう永久に割れてしまったのは確かだと思った。そのくせ、あくる日、昼食のときになって、マチルドの前に出ると、ぎこちない、おずおずした態度を見せた。こんな欠陥をひとから咎められたことは、これまでになかった。小さなことでも、大きなことでも、自分がなにをすべきか、またなにをしたいのか、はっきり自 20
覚していたし、それを実行してもきた。

その日、昼食のあとで、ラ・モール夫人から本を取ってくれと頼まれた。危険思想の本だが、かなりまれなもので、その朝、教区の司祭がこっそりもってきてくれたものだった。ジュリヤンはその本を小テーブルの上から取ろうとして、うっかり、ひどく汚ない、青色の古 25
い花瓶を落してしまった。

ラ・モール夫人は悲痛な叫び声をたてて、立ちあがると、そばに寄って大事な花瓶のかけらをつくづくと眺めながらいった。「これは日本の骨董品なのです。シエルの修道院長をしていた大伯母からいた

だいたのです。オランダ人が摂政のドルレアン公に献上し、公爵がそれをお姫さまにお贈りになったのです……」 30

マチルドはこの青い花瓶を、ことのほか汚らしいと思っていたので、こわれたのを見て内心大いに喜びながら、母親の動作を見守っていた。ジュリヤンは黙ったまま、そうあわてた様子を見せなかった。ラ・モール嬢がごくそばに来たのを見ると、 35

「この花瓶はもうこわれてしまって、元どおりにはなりません。かつてわたしの心を支配していた感情も、これと同じことです。そのために、いろいろ血迷ったまねをしました、どうかお許してください」

　　といって、彼はさっさと出ていった。

　　出ていくのを見て、ラ・モール夫人がいった。 40

「ほんとにまあ、ソレルさんというひとは、こんなことをしでかしておきながら、得意になって喜んでいるようね」

この言葉はマチルドの胸にぐっとこたえた。《たしかにそう、お母さまはぴったりいいあてたわけだわ。あのひとの今の気持はそのとおりなのだわ》ここに至ってはじめて、前の日にジュリヤンをやりこめたときの喜びが消えた。そして、つとめて平静を装いながら、つぶやいた。《そうだわ、なにもかもおしまいよ。あたしにはいい教訓になったわ。あたしは大それた、面目丸つぶれの過ちを犯してしまった！ でも、そのおかげで、これからは一生賢く暮せよう》 45

《どうして、おれは、ほんとのことをいわなかったんだろう！ あの気違い娘にいただいていた恋心が、どうして今もなお、おれを苦しめるのだろうか？》と、ジュリヤンは思った。 50

この恋心は、ジュリヤンの思いどおりに消えるどころか、見る見るうちにつのってきた。《なるほど、あの女は常軌を逸しているにちがいないが、かわいいことに変りはない。あれほどきれいな女がまたとあろうか？ とびきり粹な文明が見せうるかぎりの強い喜びといったらよかるう。それがどれもこれもラ・モール嬢の一身に集まっているといった感じだ》過ぎ去った幸福の思い出が、ジュリヤンの心をおそ 55

い、理性的な考えをたちまち打ち破ってしまった。

理性はこうした種類の思い出と争ってみてもはじまらない。理性を 60
いかにきびしく働かせたところで、悩ましい思い出はますますかきた
てられるばかりである。

古い日本製の花瓶がこわれて二十四時間後には、ジュリヤンはまさ
におよそ不幸な人間のひとりとなっていた。

I 『読み解く』第11章の概念装置

小説の読者は、主人公をはじめとする登場人物たちの視点に寄り添う。その
視点は、完全に無知な状態、模索的な状態、知悉の状態などいろんな性質を帯
び得る。だから、語り手は、文章効果を高めるために、そのような種々の状態
を言説中に巧みに配置する。

『読み解く』第11章では、真夜中頃に目を覚ます主人公ジャンヌの視点が、
椅子で眠っている目の前の女をめぐって、上記の順序で描き出されていた。ま
た、その女である、他ならぬロザリの視点にも、それと似た移り変わりが認め
られた。ジャンヌに自分がわからないことが不思議だという気持ち、なぜ自分
がジャンヌの許に戻ってきたかをジャンヌが訝るのを理解できないという気持
ち、そして、自分が戻って来た理由を述べる時の心境、という変化である。

つまり、『女の一生』の語り手は、模索する視点どうしが、断章の最後にな
ってはじめて重なり合う結構を築いている。そうすることで、多大な感動と
深甚な印象をわれわれ読者の胸にもたらす。

また、複数の視点どうしの関係としては、「孤独」なそれ、「不調和」なそれ、
「調和的」なそれが挙げられる。孤独な視点は、『読み解く』第11章のテキスト
では、真夜中頃に目の前で眠っている女を見守るジャンヌという図によって表
象されている。そこでは視点の交錯が成立していない。

一方、視点が交錯する場合、その様態には2とおりある。不調和な交錯と調
和的な交錯である。対話では、この2つの交錯が次々と現れ出る。「いったい
お前さんだれ？」とのジャンヌの問い掛けは、そこに情が籠っていないぶん視

点の交錯が不調和である。それに対して「どうして帰ってきてくれたの、お前？」という同じくジャンヌの問い掛けには、深い情が籠っている。だから、これを調和的交錯と呼ぶことができる。

このように、小説の視点には、交錯の有無とその調和性という2つのバロメーターが存在している。『読み解く』第11章の断章では、孤独な視点から交錯する視点への劇的な移行、そして、交錯する視点の内にあるのは、不調和な状態から調和的な状態への同じく劇的な移行の、2つのコントラストが築かれていた。けだし、ダイナミズムに富んだ文章構造であった。

ところで、ある小説をはじめて読む段階では、われわれ読者の視点は、その小説の言説が呈する線形性の内に限局されている。そのような初読の際の情報収集は、拙稿で取り上げられているすべてのファクターを網羅し得ない。さらに、ある一つのファクターに関する情報の収集においても遺漏が少なくない。

小説文のこのような複雑さを前にして、われわれは通り一遍の視線をそれに投げかけるだけで満足することもできるだろう。しかし、人によっては、不完全さを免れ得ない初読を終えたのち、その不完全さを補おうとして再読の段階へと移行していく。

この再読の段階では、すでに得られている情報が手がかりになるので、読解の様相が、線状的なものから図表的なものへと進化を遂げる。質と幅において初読の視点をはるかに凌駕する。小説の分析者の視点は、このプロセスをさらに推し進めたものに他ならない。小説を徹底的に読み解くことによって、分析者は、全知全能の語り手の立脚地にまで登りつめることを目指す。このような企てを試みる分析者の動機は何なのか。

それは、好奇心と克己心と防衛本能である。

自分の心に感動を与えた小説の諸要素をよく知りたい、という好奇心に衝かれて、人はその小説の分析に乗り出す。これは必ずしも常に愉快なことではない。壁にぶつかることもある。けれども、その壁を乗り越えようとする克己心を人は持っている。また、その分析で得たものを「武器」として他の小説作品に挑むことができる。

II テクストの分析

本断章にはジュリヤンとマチルド、それに脇役としてのラ・モール侯爵夫人の3人が登場する。侯爵夫人はジュリヤンとマチルドの「恋仲」を知らない。それに関する彼女の視点は、「無知な状態」に止まっている。夫人の関心は、専ら「危険思想の本」と「日本製の花瓶」に集中している。しかし、彼女はそれと気づかずに、破損した「花瓶」をめぐる、若い2人の「不仲」について暗示的な言葉を発する。

「ほんとにまあ、ソレルさんというひとは、こんなことをしでかしておきながら、得意になって喜んでいるようね」

(41～42行目)

この言葉は、ジュリヤンとマチルドのこの時点での関係に符合する。その比喩性が、マチルドの心理状態を的確に捕らえている。だから、それが「マチルドの胸にぐっとこたえた」(43行目)わけである。言葉の遣り取りの単なる題材であるに止まらず、花瓶の破損は2人の険悪な関係を表象している。例えば、ジュリヤンは、36～38行目で我知らず次のような言葉を口にする。

「この花瓶はもうこわれてしまって、元どおりにはなりません。かつてわたしの心を支配していた感情も、これと同じことです。そのために、いろいろ血迷ったまねをしましたが、どうかお許しください」

もっとも、自分たちの仲がすっかり途絶えたと思うマチルドと異なって、ジュリヤンは彼女をどうしても諦め切れない。この2人の対照は、断章中に連続して表れる次の2つの内的独白から明らかである。

《そうだわ、なにもかもおしまいよ。あたしにはいい教訓になったわ。あたしは大それた、面目丸つぶれの過ちを犯してしまった！ でも、そのおかげで、これからは一生賢く暮せよう》／《どうして、おれは、ほんとのことをいわなかったんだろう！ あの気違い娘にいただいていた恋心が、どうして今もなお、おれを苦しめるのだろうか？》

(47～52行目)

2人の仲がこれで終焉を迎えると考える読者はいないだろう。特に、ジュリ

ヤンの「恋心」は「見る見るうちにつのってきた」（53～54行目）とある。彼の情熱が満たされないことには、ストーリーは宙に浮いたままである。不安定さが極まりない。

マチルドの場合にしても、「これからは一生賢く暮せよう」との彼女の呟きからは、アイロニカルな響きを感じ取られる。そのような結末を、『赤と黒』の冒険小説的性格は許すはずがない。ちょうど第6章のレーナル夫人の「別れを告げる手紙」と同じような結構である。

この断章を通じて、ジュリヤンの視点とマチルドのそれは「摸索状態」にある。われわれ読者は、彼らの恋の成り行きが、どのような大団円に辿り着くかに興味を募らせる。この観点から見れば、「知悉の状態」にある視点は語り手のそれのみである。読者は、今後のストーリー展開を用意している語り手の才能に期待をかける。

ところで、本断章に出てくる「日本製の花瓶」ほど詳しく取り上げられている小道具は、『赤と黒』にあっては他にない。破損した花瓶に、3人の登場人物が各人各様の視線を投げかける。

この花瓶の謂れを知悉しているラ・モール侯爵夫人は、こう述べ立てる。

「これは日本の骨董品なのです。シェルの修道院長をしていた大伯母からいただいたのです。オランダ人が摂政のドルレアン公に献上し、公爵がそれをお姫さまにお贈りになったのです……」

（28～31行目）

しかし、若い2人はこのような謂れに無頓着である。ジュリヤンは、「この花瓶」と指呼しただけで、部屋から「さっさと出ていった」（39行目）し、一方マチルドは、汚らしいと思っていた花瓶が壊れたので、「内心大いに喜び」（33行目）を感じた。

ある事物をめぐる、1人の「知悉する視点」が、それ以外の2人の視点によって気にも留められない。また、後者の2人の視点は、その事物に何らかの感情を抱いていたか否かによって区別され得る。けだし、ジュリヤンは、端から花瓶の存在そのものをほとんど意に介していなかった。

*

視点の交錯の様態には、そもそも交錯が認められない「孤独な視点」と、交錯が認められる「不調和な視点」と「調和的な視点」がある。

14行目からの1段落では、ジュリヤンの孤独な視点と不調和な視点が垣間見られる。

まことに意外なくってかかりかたなので、ジュリヤンがまず結論として考えたのは、マチルドの自尊心にはとめどがないということだった。ふたりのあいだが、もう永久に割れてしまったのは確かだと思った。そのくせ、あくる日、昼食のときになって、マチルドの前に出ると、ぎこちない、おずおずした態度を見せた。こんな欠陥をひとから咎められたことは、これまでになかった。小さなことでも、大きなことでも、自分がなにをすべきか、またなにをしたいのか、はっきり自覚していたし、それを実行してきた。

マチルドと自分の仲が「もう永久に割れてしまった」と思うジュリヤンの視点は、孤独なそれを表象する。しかし、その思いは完全なものではなかった。昼食のときにマチルドの前に出るジュリヤンは、「ぎこちない、おずおずした態度」であった。自分たち2人の仲を意識していたからである。また、ジュリヤンの内面にも不調和性が認められる。これまでの果敢な自分といま現在の優柔な自分が相剋の関係にある。

このような矛盾は、すでに引用した次の自由間接話法にも認められる。

《どうして、おれは、ほんとのことをいわなかったんだろう！ あの気違い娘にいただいていた恋心が、どうして今もなお、おれを苦しめるのだろう？》と、ジュリヤンは思った。

ここでは、マチルドに許しを乞い願った自分と、マチルドを恋慕う自分が、相剋の関係にある。ジュリヤンの内面で、先刻の自分と現在の自分が不協和音を奏でている。

マチルドの場合はどうだろうか。46～49行目にはこうある。

そして、つとめて平静を装いながら、つぶやいた。《そうだわ、なにもかもおしまいよ。あたしにはいい教訓になったわ。あたしは大それた、面目丸つぶれの過ちを犯してしまった！ でも、そのおかげで、これからは—

生賢く暮せよう》

彼女が本心からこのように思っていないことは、「つとめて」と「つぶやいた」の字句のニュアンスから明らかである。

「つとめて」からは、この眩きが強いてなされたことが窺える。人が何かを決意する瞬間には、自分に対して率直な気持ちからそうするのであって、自分に無理強いするわけではない。だから、ここの眩きはマチルドの真の決意を表していない。また、「つぶやく」は、例えば「決心した」とか「心中で誓った」とかの言い回しと比べると、いかにも弱々しい。そこには心の揺れが潜んでいる可能性が十分にある。本心ではないが、たまたま口に出して言ってみるといふ脈絡において、人が「つぶやく」ことは往々にしてある。

このように見ると、「これからは一生賢く暮せよう」とのマチルドの思い込みが、危うい足場に立っていることがわかる。真の自分と上面の自分との相剋である。このように、ジュリヤンの場合とよく似た不調和性が、彼女の内面にも認められる。

調和的な視点としては、ラ・モール侯爵夫人が他意なく口にした言葉とマチルドの心理が、偶然に重なり合うことが挙げられよう。41～42行目の「こんなことをしでかしておきながら」という侯爵夫人の言葉は、直接的には花瓶の破損に触れている。けれども、マチルドはこの同じ言葉を比喩的にも解釈している。彼女の胸中において、即物的意味と心理的意味が重なり合って、1つの寂しげなハーモニーが奏でられる。彼女の二重の視点が、調和的な関係を取り結んでいる。

*

われわれの分析の立場は、「断章凝視」のそれである。断片的な言説を見つめて、それに構造分析を施すという姿勢である。それでは部分的に過ぎるとの誘いを甘受しなければならない。

けれども、文庫版とは言え、上巻と下巻を合わせて約800頁に上る言説を分析の組上に載せる場合と、有効性において、どれほどの違いがあるだろうか。800頁の言説を大上段に向こうに回す場合にも、分析者は自ずとトリアージを行う。選ばれなかった箇所は忘れ去られる。これに対して、「断章凝視」は、

所与のテキストの細部にまで迫れるという利点がある。

実は、この「『赤と黒』の構造（三）」を書いているあいだに、筆者は『赤と黒』の全体をいま1度通読してみた。現在ここを執筆している2箇月ほど前のことである。かなりの速さで読み返した。けれども、そのようにして読むではみたものの、いまなお鮮明に思い浮かべられるのは幾つかの切片だけである。それならば、所与の断章を集約的に分析したほうが、テキストをわれわれの脳裡に永く留め置くことができるのではないか。実際、速読しながらも「立体的」な形で眼前に立ち現れるのは、すでに本稿で分析した箇所にほとんど限られていた。それは、筆者がそれらの箇所に自分を「投資」したことによる。その結果として、それらが自己の深部に沈澱した。

断章凝視によって小説文に迫っていくことの効用の1つは、まさしくこの点にある。われわれは、そのようにして小説文を分析すればするほど、所与のテキストと一体になれる。それを自己の内面に取り込むことができる。ただし、断章凝視による分析の醍醐味の1つはこのことに存する。

それでは、どれだけの長さのテキストであれば、凝視するのに最適なのか。にわかには応えられない疑問だが、結局は、分析者の趣味に帰着するのかもしれない。筆者は、文庫版でほぼ3頁を目安としている。これまでの経験上、この頁数に過不足を感じたことはない。テキストの細部に目が行き届き、かつ、その全容を把握できる。けれども、繰り返すが、これは分析者の趣味によるだろう。2頁で十分だと見る人もいれば、最小限4頁は必要だと考える人もいるかもしれない。もっとも、このような異同があったとしても、分析によって得られる成果には、格段の差異はないはずだ。ある1編の小説を全体的に論じるのではなく、むしろ細部に注目するという基本姿勢において乖離がないからである。

本章では、例によって3頁程度の長さの小説文を、「視点」の観点から分析した。この観点の選択は、成り行き上そうなったことである。『読み解く』第11章の内容が、「視点」をめぐる展開されていたからにすぎない。その他の6つの観点のいずれからも、本テキストを分析することは可能である。すなわち、本稿のどの章についても言えることだが、本章での分析は特定の1つの観

点から対象に迫り行くという特徴を有する。

Ⅲ まとめ

われわれは、現実社会において、他者との様々な視点の交錯を経験する。社会で生きていくうえで、それを避けることはできない。一方、孤独な状況にある自分を見出すこともある。この状況では、自己の存在を改めて見つめ直したり、対人関係の面でのこれからの方策に思いをめぐらせたりする。あるいは、生活上の種々の問題に解決策を見つめることができたり、そうできなかったりする。

小説の登場人物たちの場合も同様である。いろんなシチュエーションに彼らは置かれる。そのつど何らかの行動に出たり、物思いに耽ったりする。われわれ読者は、人格としての彼らに感情移入を行うことによって、彼らのそのときの心境に探りを入れる。小説を読んでいる最中もそうであるが、時間を経たのちに彼らの心理や行動を反芻するときもそうだ。これまでに読んだ小説の登場人物たちの言動は、彼らの人格が良きにつけ悪きにつけ、生きる指針を立てるうえでわれわれの参考になる。

『赤と黒』の主人公は、その典型である。われわれは、ジュリヤンの視点に立って物事を追体験する。もっとも、本断章においてはマチルドも登場する。だから、読者は彼女の視点からも事象を眺める。小説の読者が登場人物たちと自己を同化する能力には果てしが無い。その証拠に、本断章で単に脇役として登場するラ・モール侯爵夫人の举止や発話にすら、読者は感情移入を行う。

小説に登場する人物たちは、われわれの普段の好悪を超える存在である。どのような極悪人が小説文のうえに登場しようとも、読者はその人物に感情移入を行うことができる。この点から見ると、語り手あるいは記述者に読者が求めるのは、様々な登場人物を鮮やかに浮き彫りにする造形能力である。

主要参考文献

- Berthelot (Francis) : *Parole et dialogue dans le roman*, Nathan, 2001.
- Bourneuf (Roland) et Ouellet (Réal) : *L'univers du roman*, PUF, 1975.
- Fontanier (Pierre) : *Les figures du discours*, Flammarion, 1977.
- Genette (Gérard) : *Figures III*, Seuil, 1972.
- Lodge (David) : *The Art of Fiction*, Penguin Books, 1992.
- Stalloni (Yves) : *Dictionnaire du roman*, Armand Colin, 2006.
- 国廣哲彌『意味論の方法』、大修館書店、1982年。
- 野内良三『レトリック辞典』、国書刊行会、1998年。
- 野内良三『レトリックと認識』、日本放送出版会、2000年。
- 吉田廣「二つの『石榴』——日仏詩文の比較対照的分析の一例——」、大阪経済法科大学論集第55号、1994年。
- 吉田廣『「女の一生」を読み解く——フランス小説の徹底分析——』、大阪経済法科大学出版部、2008年。
- 吉田廣「小説文の統合性——『雁』をめぐる——」、大阪経済法科大学論集第98号、2009年。
- 吉田廣『『赤と黒』の構造（一）』、大阪経済法科大学論集第101号、2011年。
- 吉田廣『『赤と黒』の構造（二）』、大阪経済法科大学論集第103号、2012年。